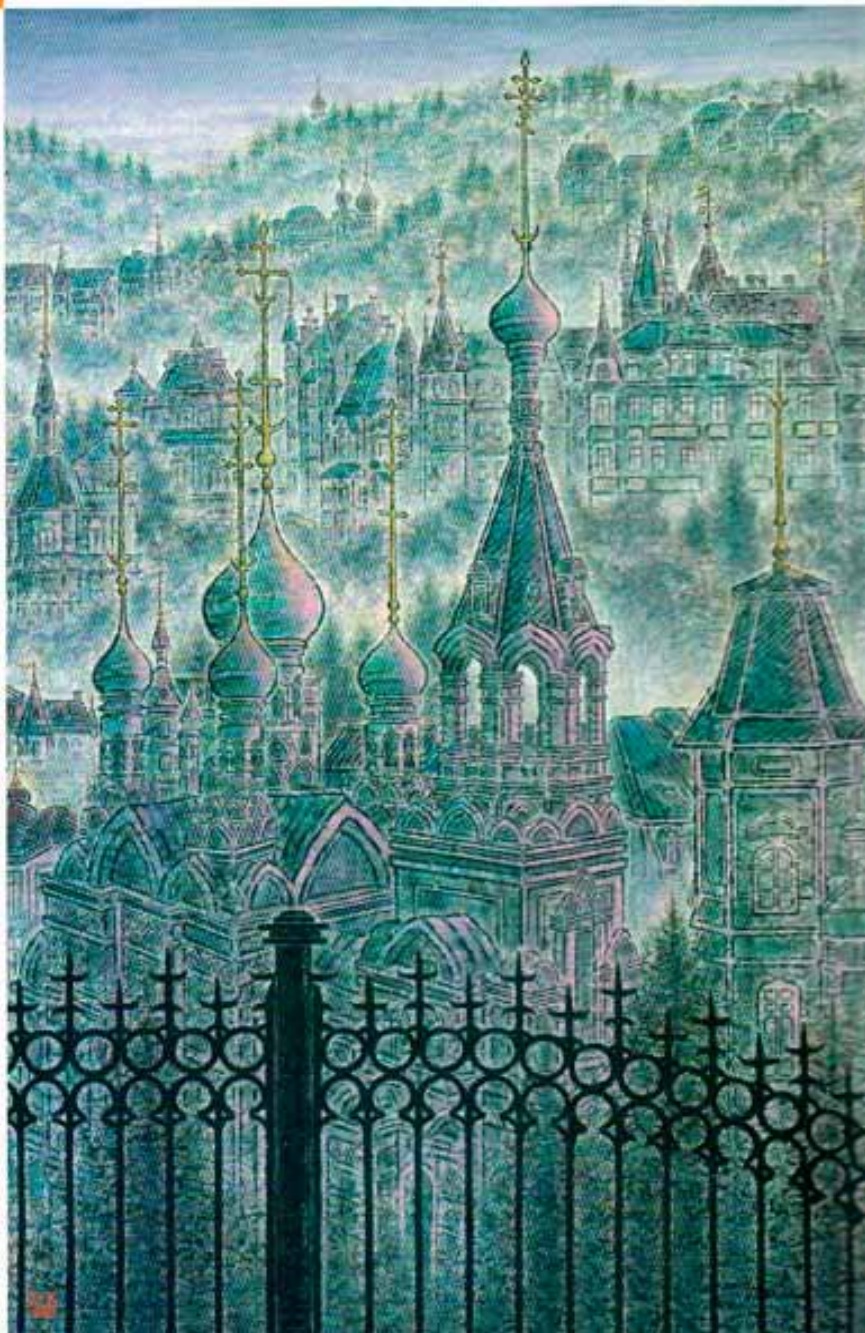
沖

昭和45年創刊　令和6年2月1日発行（毎月一回一日発行）俳句雑誌　沖　第55巻第2号

2
2024

俳句雑誌［おき］



野禽のつばさ

能村　研三

雲に雲重ね冬帝来りけり

蒲の穂のふくらむばかり沼は銀

白鳥の遠声聞こえ沼日和

白鳥の群を離れしとき白し

何もなき月

先師登四郎の全句集を開くと、実に「二月」を詠んだ句が多いことに気付く。

二月てふ何もなき月住みよかり

平成九年『芒種』

ざっと数えてみただけでも、二十句は越える。その中のいくつかを拾ってみると、

寡作なる人の二月の畑仕事
おどろくほど若し二月の耕人は
待つことばかり二月の空はきらなす
土と日のにほふ二月の荒鋤田
絵暦の二月の色のさびしけれ

一月は「去ぬ」、二月は「逃げる」、三月は「去る」と言われるようにこの三か月は短く感じられる。二月は日数が少ないこともあるが、農家にとっては、来るべき農繁期までの休息の時期で、なるべく休息日が長くあってほしいと思うこともあり、時間の経過が早く感じられるのだろう。二月は暦の上では立春を迎える月だが、まだまだ寒さが厳しいこと

白鳥の野禽のつばさ折りたたむ

白鳥を見てゐる眉の濃かりけり

羽繕ふ急回転の鵠の頸

しなやかにしたたかに白鳥の頸

裸木の朴に留守居を頼みけり

朴一樹父母の樹として年逝かす

も多い。寒さをしのぐために着物を重ねて着ることから二月を「衣更着」と呼ぶこともあり、十分な防寒が必要な時期でもある。

冒頭で掲げた登四郎の句、教職にあった時代だと二月は入学試験の時期でもあり、学校は一番忙しい時期で何も無き月などと悠長なことは言っていられない。教職退職後の一俳人としての感慨として二月を捉えた句なのだろう。

二月田の水湧く場所は榛の下

昭和四十八年『幻山水』

この句を作った時、たまたま私も父に同行していたので、思いがある句である。

市川市でも田園風景の残る大柏川河畔に父のポートレートを撮りにいった時の句で、畦にある一本の榛の木は芽吹きの前でさびしく立っていた。登四郎はこの句あたりから心象風景を脱して、リアリズムを鮮明にする句風になりつつあった時期でもある。

能村　研三

風の又三郎

森岡　正作

十二月八日茶碗に罅の奔りをり

冬の蜂ひねもす玻璃の日を舐めて

静電気奔る指先猟期来る

枯菊の枯るる途中を焚かれけり

掃き集められて姦し柿落葉

風花の付き来る郷の宅急便

渦巻ける枯葉に風の又三郎

元朝や

元日は窓から射す陽光で目が覚めた。まず玄関へ出て拍手を打ち、それから門に出て真正面の富士に向かって拍手を打つのが例年の慣である。寝坊せずに早く起きて二、三十分も歩けば湘南海岸の浜辺へ出て、初日の出と富士山を拝めるのであるが、まあ晴天の神々しい富士だけで十分であろう。登四郎先生に〈**元朝や声先んじて晴れをいふ**〉や〈**元旦の穏やかな日を誰も褒む**〉という御句がある。

元朝や大旦という言葉は俳句をやるようになってから知った。元日は晴れるに越したことはない。雪国に居た少年時代、雪の降り積もった朝は一番先に外へ出て、門までの真っ新な雪に足跡を付けるのが好きであった。ぴーんと張りつめた空気、雪が付着して直径十センチぐらいのロープのような太さの電線、屋根の雪も木々の雪も何もかも新鮮であった。

そんな純真な感性を、私は何時失ってしまったのだろうか。

濤声集

玉の緒の

千田百里

＊神留守の雲ひとひらも見ぬ不安
電線は木枯の愚痴聴いてゐる
ハンガーのおしくらまんぢゆうして句会
数へ日のひと日は母の爪切る日
付箋紙で膨らむ人日の句集
玉の緒の八十路半ばの粥柱

遠ざかる

辻　美奈子

東京の底ひゆく川十二月
レノンの忌列車は都市を遠ざかる
白鳥の声にアルトのまろみあり
シベリアの凍知る翼休めをり
＊獣の仔眠るが如く枇杷の花
屠蘇散や直美てふ名で真つ直ぐで

蒼茫集

蒼鷹

大沢 美智子

きのふまでひぐらしの樹でありにけり

冬林檎さくと少年歯を出る

マスクなき歯科医と出会ふ西の市

もてなしはまたたび酒と薬喰

狙銃音限界集落揺るがせり

＊断崖は海濤へ落つ蒼鷹

雪吊

大畑 善昭

八十六歳をぴんぴん新走り

雪吊は結びの美学縄の張り

紙に指切られて寒さにはかなり

のつしりと雪の来てゐる夜の底

きのふの灯けふの灯街は雪深く

＊数へ日の数へ時間の葬りあり

冬の圧

高木嘉久

小春日は底に届きて神田川

＊枝折戸を押せば微かに冬の圧

丸薬の逃げて隠るる寒夜かな

積ん読の山に冬至の日射かな

歳晩や昨夜の値札の早や替はり

相続の本の平積み冬深し

火を蔵す

広海あぐり

雁渡し白根浅間は火を蔵す

雁渡し種にうすうす土被せ

秋富士へ三保の松原つぱさ張る

＊凍星や泣きたき時の深呼吸

かさこそ音させ真夜中も散るいてふ

冬に入る山懐にワイン樽

沖作品

能村研三 選

城てふはあるじ転遷鳥渡る　千葉　池田　文枝

隠沼にするりと呑まれ冬落暉

楽の音の夜に沁み入る里神楽

＊白鳥の一羽一羽に孤高あり

輪唱のやうに葉の擦れ枯すすき

武蔵野をつつむ彩雨や暮の秋　東京　川和　宏平

＊朝霜を踏んで太極拳無音

木がらしの抜けて星降る雑木山

冬落暉野路は暮るれど赤筑波

谺して山路に落葉轢く響み

＊侘助の白こそよけれあまねき日　千葉　平嶋　共代

牡丹焚くほのとあまき香漂へり

夜の帳下ろすは鬼女か牡丹焚

絨毯の絹の手触りねむり姫

水冷た顔を小さく洗ひけり

ユッカ咲きショパンの似合ふ庭にをり　牛島　晃江

哀調のロシア民謡聖樹の灯

から松の影を弾くや三十三才

＊籠に置く林檎挿絵のやうに在り

街騒をしづめて過ぐる片時雨

漉く紙に十万石の日ざしかな　青森　秋谷美智子

＊白鳥のこゑ明けの空より降つて来し

干菜吊る里にはさとの暮し方

寒菊の白を雫して暮れにけり

湯豆腐の小さき震へを掬ひけり

あの世には貧富なからむ一葉忌　千葉　神尾　芳秀

＊生くること未だ倦まざる枯蟷螂

父母の見え隠れする枯野かな

祈りとは生くる糧なり降誕祭

今年はや歴史となりぬ年の暮

かりがねの遠く近くやよもすがら　神奈川　石原　杏
水底に冬の金魚のしづもれり
*藪柑子地のぬくもりを纏ひをり
路地裏の奥へ奥へと大熊手
現世を逝きつ戻りつ草の絮
*柚子湯して長きを妻に覗かるる　埼玉　工藤　良丕
神棚の神もご機嫌掃納
魚屋のだみごゑ聞きつ年用意
芋あらば放り込むべし落葉焚
能筆に染むる人柄年賀状
急かされて冬支度する四畳半　東京　藤井ふさ子
*冬ざれや走り根の瘤踏みしめる
自由とは何もせぬ事枯すすき
丹沢の夕日すとんと落ちて冬
潮引いて引いて渚の淑気かな
初旅の客の喜ぶ島料理　曽根新五郎
*流木は渚のオブジェ初景色
黒松の渚の影絵初明り

*モノクロに眠る大地や霜だたみ　千葉　矢野　隆男
天狼のブルーダイヤの一睨み
屋久杉の今ここに在り神渡し
一陣の風に棘ある寒さかな
宿直の茶よ月は微臭く冴ゆ　市川市　池之端モルト
項垂るる麒麟の睫毛冬来たる
ゲルひとつ産み落としゆく白鳥座
*中也の描く凍月の設計図
*霜柱地球の朝を持ち上げて　千葉　鷲巣　雅子
肌理粗し海近き地の冬林檎
廃校が決まりし庭に銀杏落葉
杖二本遺してゆけり枇杷の花
夕明り牛飼ふ家の冬薔薇　白井　淳子
*生きしものみな銀色に枯芒
借景の山塗り替へる櫨紅葉
燠の黙時空過去へと牡丹焚
*冬めけるものの一つに己が影　埼玉　有井千枝子
うかと本音洩らしてしまふ日向ぼこ
マリオネットの遠き目差しクリスマス
二人居のこの静けさが好き冬灯